

## 不妊治療における AMH と内分泌の関係

～卵巣年齢を知るために～

◎小椋 圭<sup>1)</sup>、小笠原 恵<sup>1)</sup>、野村 さつき<sup>1)</sup>、稲垣 奈緒<sup>1)</sup>  
社会医療法人財団 新和会 八千代病院<sup>1)</sup>

【目的】抗ミュラー管ホルモン (anti-Mullerian hormone : AMH)は卵巣予備能の指標として用いられている。内分泌機能項目と併用することで、不妊症のスクリーニングとして ART (生殖補助医療) の方針決定に役立てられている。今回、AMH と内分泌機能との関係について検討したので報告する。【対象】2015年1月から2017年2月までに AMH を測定した 997 症例。【方法】①年齢別分類②甲状腺機能異常群 (TSH $\leq$ 0.5、 $\geq$ 3.0) の比較③卵胞期初期測定 (FSH・LH) の比較④ART における平均採卵数と妊娠率との関係性について検討した。【結果】①年齢別各平均 AMH (ng/ml) は、29 歳以下 5.72、30-34 歳 4.66、35-39 歳 3.14、40-44 歳 1.81、45 歳以上 0.40 で、年齢が高くなる程 AMH は低値となった。②内分泌項目を同時測定していたのは 398 症例で、内訳は TSH ( $\mu$ IU/ml) 0.5 以下 9 人(2.3%)、TSH3.0 以上 50 人(12.6%)、その他 339 人(85.2%)であった。それぞれの群との AMH 間に有意差は認められなかった。③卵胞期初期に測定された FSH、LH は 173 症例で、AMH と FSH、LH/FSH 比との間に相関は認められなかった。

④ART を施行した 120 症例での平均採卵数は、AMH1.0 ng/ml 未満 (24 例) で 2.6 個、妊娠率は 12.5%、1.0-3.0 未満 (36 例) でそれぞれ 6.5 個、41.7%、3.0-5.0 未満 (24 例) で 7.8 個、37.5%、5.0 以上 (36 例) で 13.4 個、58.3%であった。1.0-3.0 未満と 3.0-5.0 未満の群間を除いたそれ以外の全ての群間において有意差を認めた ( $p<0.05$ )。妊娠率は AMH5.0 以上の群で最も高値となったが、全ての群間において有意差は認められなかった。【結論】AMH 値は ART において採卵数に相関を示すことから、卵胞刺激法の選択や hMG 投与量の目安となる。今回、内分泌関連項目と AMH は関係性を示さなかったが、不妊症や不育症の原因確認の為に、内分泌関連検査は必須であると考えられる。加齢と共に発育可能な卵子は減少し、質も低下していく為、卵巣年齢の指標となる AMH 測定の推奨と、早めの不妊治療開始の啓蒙に努めていきたい。

連絡先：社会医療法人財団新和会 八千代病院  
中央検査部 小椋 圭 TEL 0566-97-8111